

株式会社りそな銀行（資産運用部門）⁴

ユニバーサルオーナーとしての責任投資とエンゲージメント

りそな銀行の資産運用部門は、公的年金や企業年金を中心として20兆円超の信託財産を運用する。ユニバーサルオーナーシップの概念をベースに責任投資活動ならびにスチュワードシップ活動を進めている。2010年に署名したPRIの年次報告では、その責任投資への取組みの総合評価でA+（2018年、3年連続）の最上位を取得している。また、格付投資情報センター（R&I）が実施した年金顧客満足度アンケート（2018年）では、スチュワードシップ活動の評価で首位となった。

同社では、ESGは投資家が、SDGsは国際社会が、CSRとCSVは企業が主語にあたるものとして整理している。そして、りそなを含む投資家・金融機関は、ESGという手段を通じて、企業の中長期的な事業価値向上を目指すことで、SDGs達成という目的に貢献する。また、企業はCSVという手段を通じてSDGs達成を目指していくものと位置付けている。

同社のESG活動の特徴はエンゲージメント活動にあり、「対話」と明確に区別している。即ち、「エンゲージメント」を「解決すべき課題を設定、課題解決に向けて議論を行い、結果を出していくこと」と定義する一方、「対話」を「企業と投資家が双方向のコミュニケーションを通じ、相互理解を促進すること」と定義している。

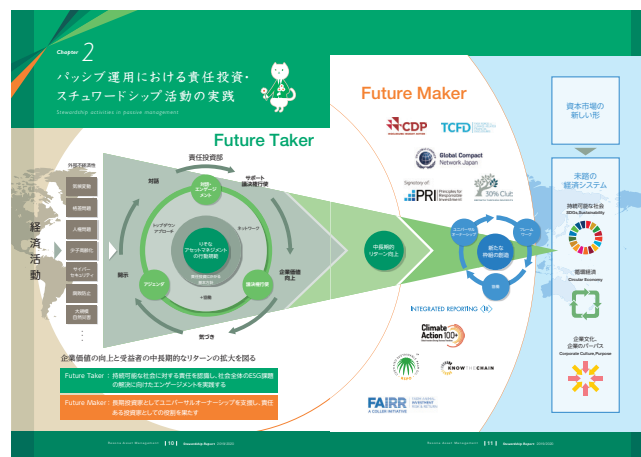
こうした整理の下、パッシブ運用では、ユニバーサルオーナーとして、持続可能な社会に対する責任を認識し、社会全体のESG課題の解決に向けたエンゲージメントに精力的に取り組んでいる。具体的には、環境・社会に関連したグローバルイシューに対してトップダウンアプローチで設定された課題（気候変動リスク、サプライチェーンリスク等）に加えて、ボトムアップアプローチで設定された課題（企業情報開示やガバナンス関連等）に関するエンゲージメントを実践している。

パッシブ運用におけるエンゲージメントにおいては、SDGsで提示されるあるべき未来からのバックキャストを基本に、NGO・有識者等の多様なステークホルダーからのインプットを受けて、テーマを絞り込んでいる。2017

年度には、気候変動にかかる情報開示、Climate Action 100+、パーム油を中心としたサプライチェーンのリスクマネジメントなどを推進した。サステナブルなパーム油の調達に関するエンゲージメントのプロセスや事例については、スチュワードシップレポート2018/2019で複数ページにわたって詳細に開示されており、同社の特徴がよく分かる内容となっている。また、2018年度には、取締役会のダイバーシティ、海洋プラスチック問題、食の安全（工場の畜産と耐性菌問題）を新規テーマとして追加した。

エンゲージメントのテーマ選定等のプロセスにおいて外部ステークホルダーの意見を取り入れている。環境や社会をテーマとした対話・エンゲージメントは当初、慣れないこともあり、間合いを取ることに苦労した。また、上記のような環境・社会課題は、企業側との認識のズレが大きく、認識に関する溝が埋まるのに時間がかかったと振り返っている。

同社は、資産運用業務の競争力の源泉は人材であるとの考えがあり、現在は人材育成に注力している。ESGの議論は、損得だけではなく善悪の議論が入ってくるため、ESGをHOWに終始させず、よりホリスティックな議論へつなげるべきだと考える。また、こうしたことについて正しく理解を持った人間を金融として育てたいという。りそな銀行の責任投資・ESGへの取組みが今後も期待される。



⁴ りそな銀行（資産運用部門）は2020年1月より、りそなグループの資産運用業務をりそなアセットマネジメントに集約された。